

戦後80年

私の戦争の記憶

1945年8月15日に太平洋戦争が終結してから、今年で80年を迎えます。

みどり市でも、当時の新田郡笠懸村・山田郡大間々町・勢多郡東村ともに、召集によって戦地に赴き命を落とした戦没者が多くいます。また、笠懸村久宮地区と鹿の川地区にかけて桐生愛国飛行場が存在し、終戦の直前にアメリカ軍の爆撃機による空襲を受けるなど、先の大戦は人々の暮らしや心に大きな傷跡を残しました。

戦争を経験した世代が減っていく中で、その貴重な体験を後世に語り継ぎ、戦争の悲惨さと平和の尊さを次の世代に伝えていくため、市内在住の戦没者遺族の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介いたします。全文は市ホームページに掲載していますので、ぜひご覧ください。

社会福祉課 ☎(76) 0975



市HP



桐生愛国飛行場



出征兵士を送る行列

父の思い出

秘密動員として召集を受けて出征して行く時、父は浴衣を着て、下駄履きで、その辺りの町へ遊びに行くような身支度をして、母と長男の私のたった2人に見送られ、足尾線上神梅駅より出征して行ったことを記憶しています。

その後、東部第38部隊に召集され、水戸歩兵第102連隊補充隊に編入。昭和20年3月23日、フィリピン・ルソン島で激戦に参加し、戦死。享年35。

（大間々・磯田丈男）

戦後80年の節目に願うこと

私の父は、北千島にて戦死したと聞いています。北千島への慰霊巡拝は叶いませんでしたが、遺族の会主催の戦没者遺族援護事業での参拝は、亡き父に会えたような気持ちにさせてくれました。

昨今、世界各地での紛争を目にし、多くの人が苦しむ姿を見ると、夫を亡くして大変な状況の中、幼い私を育ててくれた母の姿と重なり、胸が締め付けられる気持ちになります。

戦後80年の節目に当たり、もう一度平和の尊さ、生命の尊さを心に刻み、日本の平和と世界の平和を願いたいと思います。

（笠懸・赤石道子）



疎開学童

終戦 その不条理の時

昭和21年4月19日は、父の命日です。母の歌集を読むと、歌の一つ一つから母が慟哭する姿が思い浮かび、涙が止まりません。

「花の頃はかならず来むと待ちわびし その花の日に君は逝きにし」

終戦の日から8カ月経った時、父の戦死報告がありました。再会の知らせに胸を膨らませている8カ月間は残酷です。そして、父の戦死報告は不条理の極みです。

「手を合す夫の遺影の若きまま 今日50回忌の法要をなす」

母80歳、父の50回忌を済ませ、文箱の奥からやっと写真を床の間に飾ることができた時です。私はこの時を振り返ると、いつもこの終戦の不条理に涙します。不条理の時代を過去のものとして胸にしまい、平和な時代を大事に過ごして80年。もっと平和な日本へと努力を惜しみません。

（大間々・中島正夫）

父が眠るフィリピン島

父はフィリピン・ルソン島で、昭和20年7月28日、28歳で戦死しました。私が1歳の時でした。父は子供の顔が一目見たいと言って出征したそうです。

平成18年、戦没者遺児による日本遺族会慰霊友好親善訪問団に遺児として参加し、初めてフィリピン島に行きました。ドモン河に流れる橋を渡り、橋の空き地に祭壇を準備しました。

祭壇の写真を見ながら追悼文で報告し、長かった人生で初めて父さんと呼ぶことができました。

（笠懸・本間孝太郎）



フィリピン島訪問

大戦時の世相

小学校2年生の時に戦争が勃発し、6年生の夏に終戦を迎えるという大戦の始終を体験した小学生時代でした。グラマンと呼ぶ小型戦闘機の機銃掃射の音を聞いた時には、驚きと恐怖を覚えながら防空壕に避難したものです。

多くの若い人たちは、日の丸の旗に見送られて戦地に赴き、尊い命を捧げました。私の長兄も志願して海軍に入隊し、戦火が激しくなったフィリピンの海で戦死、21歳の若さで黄泉へ旅立ちました。平時を知らない兄は、未だ異国の海で眠ったまま、今どんな夢を見ていたのでしょうか。

大戦後80年、戦争忌避の気運も高まっている今日、自国自身に都合のいい正義を掲げて戦争を仕掛けていく為政者の寛容な精神への翻意を促す術はないのか願うばかりです。

（大間々・野村年穂）

戦争と家族

女井家からは戦死者が2人出ています。

私の叔父は、病氣療養中のところ帰宅し、中華民国第33師団第1野戦病院で死去しました。

私の兄は、入隊前には青年団の役員として活動していました。ビルマ（現・ミャンマー）で戦死しました。

女井家は、戦前には水田、畑、山林の保有が地域一番と言われていましたが、前記二者を失ったことにより、残ったのは老人、女性、子ども、病弱者であり、労働力がなくなり、生活にも影響するようになりました。

（笠懸・女井重男）

美しい海

父は、母と4歳の姉、2歳の私、生後100日の妹を残し、赤紙一枚で宇都宮の部隊へ入隊しました。そして、昭和19年12月31日、パラオのペリリュー島にて玉砕しました。

昭和62年、群馬県遺族の会主催の第1回海外戦没者慰霊巡拝団の一員として、初めてペリリュー島を訪れました。緑豊かな島々からなるロックアイランド、この美しい島で戦争が行われたとは、現在観光で訪れている人々には、想像もつかないことでしょう。

お亡くなりになられた方々の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

（大間々・石川正子）

追悼文

父は、私がまだ母の胎内にいる昭和18年の春に出征しました。きっと母と生まれてくる私を心配しつつ、不平を言うこともできず、誰を恨むことなく、国のためと思い、命を捧げたのだと思う。

父が戦死したことで母子家庭になり、母と私は4歳で別れ、私は叔父に引き取られました。学級の中でも近所の遊び仲間にも、父親がいらない、まして戦争遺児は、私の他にいませんでした。もし父が満州で助かっていたならば、普通の生活が送れたのではないかと思います。

父は、楽器とスキーを趣味としていたようです。戦地では、きつと母や私に楽器の演奏を聞かせて楽しんでいる夢を幾度となく見たことでしょう。恒久平和は絶対に守っていかなくてはなりません。

（大間々・星野隆）